



季刊

# じねん

2021.1.25  
中央仏教学院  
通信教育同窓会  
大分支部

本年も一遍でも多く、  
お念仏を申す事が  
できますよう・・・  
本年も宜しくお願い致します。  
令和三年一月二十五日

## 「母に言えなかつた一言」

大分市野津原  
阿南房江

それは「産んでくれて有難う」の言葉です、十五年前に九十歳で亡くなり父が大陸に出征後に母の妊娠が判明し近隣の目が気になり、戦地の父に手紙で伝えると「産むよう」との返信が有り、私は此の世に生を受けました。ですから、もし母が独断してたら、私は生まれ無かつたかと思うと、ただ感謝のみです。若い時は、少しも、そんな事を思わず、心配ばかり掛けてました。「産まなければ良かったのに！」と、母に言い返すと、母は「貴女が結婚して、自分の子から、その様に言われない様な母親になりなさい」と言われ、何も言えず、体で反発した事を、今でも鮮明に記憶しています。父が戦後、復員した時は、私は六歳だったので、突然知らない小父さんが現われ「お父さん」と、声を掛けられず近づく事が嫌いでした。父も戦争の犠牲者だったのでした。

私は五人姉弟の次女ですが、両親は孫十人に恵まれ、浄土に還られました。八十才を過ぎ、やっと仏縁の有難さを感じる身になりましたが、有縁の方の御指導で遅々たる歩みでも、聞法させて頂き

(合掌)

## 『不完全燃焼感と未練』

野津原 安藤康彦

昨年末は親族の葬儀と法要が続き少し疲れて、賀状は一枚も出さずでした。しかし真宗の僧侶方の、法話などに触れる機会を頂き感じた事は、死者供養と葬式仏教に成っており、参列者も当然視しての現状でした。昨春にも述べさせて頂きました。私は中学一年生の時に神経症が始まり(勿論、当時は、その心理カラクリも知らず、ただ苦悶増大の日々でした)完全な勉強不能状態の高校時代は、聖書や亀井勝一郎の著書などに出遭い

読むも、理解不能でした。当時、「東京五輪で「東洋の魔女」と言われた女子バレーボールの大松監督の「なせば成る」の著書で、精神鍛錬に心が向いて高揚して行くのを感じた。卒業前の一大決心で修養と鍛錬に全精力を投入し、過熱の二十代前半でした。その時に、読んだ本に、執権・北条時宗が禅で胆力を練った等、効能が列記されていました。そして有る老師に身に余る御縁を頂きました。老師は「本当の自分とは何か?」五尺の体、五十年の命が真の自分では無い」と、と常々仰せられていました。しかし、その事には目が向かず求める事の不可の心を求めて日々でした。古稀を超えた現在、往時読み耽った、老師や鈴木大拙師や秋月竜珉師の著書の時々懐かしく拝読させて頂き、当時の自分の姿勢が如何に未熟で幼稚か痛感させられます。

京都で取材中に求道心が生じ、禅宗の老師に参禅精進し、十余年以上の苦闘の末に回心し、それまで唱えた事の無い「念仏」を突然申す身になり、聖道門の臨済宗の行道に、一路に進んでいったのに、傾倒して行ったという箇所です。又、鉄舟会に精勤してた時、昭和45年11月号の会誌「鉄舟」の巻頭言には次の様にありましたが、未熟な私は、それに気が付く事も無く、3年後「入院森田療法」という、精神医学の恩恵を受けたのでした。日本で心療内科という分野を開いた、九大の池見博士は大森老師に著書を贈呈され、それを読んだ老師が、次の様に池見博士の一文を巻頭言に、お書きに成られました。「昔から悟りを開くためには、煩惱を断ち切らねばならぬ」というような事がいわれ、煩惱断絶の、難行苦行が試みられていたところ、森田療法である事からこれは誤りである森田博士が言っておられるように、むしろ「煩惱

即菩提」という事で、煩惱のもつエネルギーを、高度の目標を達成するために使い切り、人間の理想の姿に近づこうというのが真実であろう。泥沼から蓮の花が開き、汚い土壌の養分を吸い上げたからといって、その美しさや気高さを否定する人は無いはずである。自分の中には諸々の欲求や可能性に目をまわす事無く、ありのままの姿を見極め、それらを「真に人間らしく、本当の自分を生きる」方向に統合し調和させることといえよう。池見西次郎「自己分析」名利愛欲の強さは人一倍の私ですが、表向きは無欲を装い、図書館での読書や地域の美化活動や吟詠などに元気を出して、喜びを感じ、聞法に徹しきれ無い私です。

合掌



和讃 575  
ひたすらに  
ただひたすらに  
南無の道  
竹田市 吉岡 雄三  
恩徳広大釈迦如来  
韋提夫人に  
勅してぞ  
光台現国の  
そのなかに  
安楽世界を  
えらばしむ  
(浄土和讃) 73  
「観経」意  
(意訳)  
慈悲広大な釈迦如来は、  
韋提希夫人に勅命して、  
釈迦が光明の中に示された諸仏の国の中から、阿彌陀仏の安楽浄土を選ばせて、その阿彌陀仏の浄土へ生れたいという思いを起こさせた。

それでは「観経」の内容について簡単にふれておきます。首領は王舎城。マガタ国の頻婆沙羅王は、釈迦の説法にも耳をよく傾け、善政をしき平和なくこの国で大きな事件がおこります。「王舎城の悲劇」と言われていますが、この「阿闍世」が悪友にそののかされ、自分が父王にとつて代わろうと、反逆をおこします。父王を牢獄に閉じ込め、それを助けようとする母親「韋提希夫人」をも牢に閉じ込めます。王は獄死してしまします。韋提希はこんな子を持つたことを悲しみ、釈迦に自分の心の悲しみを訴えます。「観経」には「願はくは仏曰く、われに教へて清浄業処を觀ぜしめたまへ」と。そのとき世尊、眉間の光を放ちたまう。その光金色なり。あまねく十方無量の世界を照らし、還りて佛の頂に往まりて化して金の台となる。「とありま

す。この和讃は「恩徳広大な釈迦如来は、光台現国のその中に安楽国土を選らばせた」と「観経」の内容どおりに表現してあります。「光台現国」とは「釈迦如来の御ひかりの中に、さまざまな国を現じたまふなり」(註釈版)ということ。釈迦は悲しみに沈む韋提希に對し、いろんな仏国を見せ、その中から阿彌陀様の安楽浄土を選びとらせました。私は以前、「二尊の遺喚」ということを聞きました。向こうの岸から阿彌陀様が「来いよ」と呼んでいる。こちらの岸ではお釈迦様が「行けよ」と勧めている。阿彌陀様、お釈迦様二尊ともに、阿彌陀様の安楽浄土を勧めてくださっているという事です。最後に「観経」から韋提希夫人の言葉を引用しておきます。「世尊、この浄にしてみな光明ありといへども、われいま極楽世界の阿彌陀仏の所に生ぜんことを樂ふ。やや、願はくは世尊、われに思惟を教へたまへ、われに正受を教へたまへ」と。

